



主任コラム8月号

主任 澤井 良子

園内を回っていると、子どもたちの何気ない関わりや会話から、日々の育ちを感じる場面にたくさん出会います。

0・1歳児クラスでは、生後7カ月の新入園児を保育士がおんぶしている姿をみているからでしょうか。赤ちゃんのお人形を抱っこし、頭をそっと腕に乗せて体をゆらゆら揺らしながら、お世話をする姿が見られます。大人の姿をよく見て、そのまま遊びの中で表現している様子から、子ども達は生活の多くのことを見て学び、真似をしながら育っていることを改めて感じます。

そのため、0・1歳児クラスでは食事の場面でも、一人ひとりの発達に合わせた環境づくりを大切にしています。食べさせてもらう段階の子、手づかみ食べが始まった子…。それぞれの発達段階に応じてテーブルを分け、少し先をいく友達の姿を自然に見ながら意欲につながるよう工夫しています。子ども同士が互いの姿から学び合える環境は、日々の生活の中で大きな力となっています。

幼児クラスでも、子ども達の育ちを感じる出来事がありました。

年長児が育てているオクラは、一度にたくさん収穫できるわけではありません。そこで、栽培プロジェクトリーダーの子どもたちが「誰から持ち帰るか」を話し合っていました。「私が先に持ち帰りたい」と自分の思いを伝えあう中、一人の女の子が「私は最後でいいよ」と話しました。そして、周りを見渡し、「あっ、お手伝い保育で今行っている〇〇ちゃんの後の5番目にする」と言ったそうです。

その場にはいない友達の存在に気づき、自然に順番を考える姿に、担任は温かい気持ちになったと話してくれました。私もその話を聞き、とても心が温まりました。

日頃から子どもたち自身が話し合いを重ねてきた積み重ねの中で、自分の思いを伝える力だけでなく、相手や周りのことを考える気持ちも育っていることを感じました。また別の日には、ピーステーブルで給食当番をめぐって意見がぶつかる場面がありました。お互いに「自分がやりたい」という気持ちを譲れずにいると、一人の男の子が「どっちかが諦めるか、じゃんけんしかないと思う」と仲裁に入りました。すると、その言葉を聞いた女の子が「私、前にもやったことあるからやめるわ」と、自分から譲ることを選びました。

自分の思いをしっかりと伝えることは大切です。そして同時に、相手のことを考えたり、時には自分から譲ったりすることも大切な力です。子どもたちは日々の生活や友達との関わりの中で、そうした力を少しずつ身につけていきます。また、異年齢の友達やさまざまな年齢の保育士と関わる中では、自分の思いが通ることばかりではありません。時には気持ちがぶつかったり、相手の考えを受け止めたりする経験もあります。そうした日々の積み重ねが、多様な人と関わりながら生きていく力につながっていくのだと感じています。子ども達は、毎日の生活の中で、大人や友達の姿を見て学び、自分の思いを伝え、相手の気持ちに気付けるようになっていきます。一人ひとりの小さな成長を大切に受け止めながら、これからも子どもたちが安心して育ち合える環境をつくっていきたいと思います。

